

2016年1月17日

福音書からのメッセージ

イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。

(ヨハネによる福音書 2章 11節)

今日の箇所には、イエス様がガリラヤのカナでおこなったしるしが書かれています。イエス様たちはそこでおこなわれた婚宴に招かれていたのですが、途中でぶどう酒がなくなります。

その様子に気が付いたイエス様の母マリアは、イエス様に「ぶどう酒がなくなりました」と告げますが、イエス様はマリアを冷たく突き放してしまいます。それでもマリアは、きっと神さまの力がイエス様を通してあらわされるに違いないと信じていたのでしょう。

マリアは召使たちに言います。「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と。

そしてイエス様は、そのしるしをおこないます。そしてそのためには、召し使いたちの働きが必要でした。1つの水がめの大きさは80~100リットルです。その六つの水がめに水をいっぱいになるまで入れる。水を運んでくるのは一苦勞です。何往復もしたに違いありません。

「何で水が必要なのですか」、「要るのはぶどう酒でしょう」、「本当にあなたを信用していいんですか」、そんな言葉が召し使いの口から出ても、何ら不思議ではありません。しかし彼らは言われる通りにします。イエス様の言葉どおり、水がめに水を入れました。そこに神さまの力があらわれたのです。



水がぶどう酒になるということは、白けてしまった宴会が、喜びの食卓にかわるということです。

神さまの祝福があふれる宴の場が、そこにあらわれるのです。このしるしはただ単に、水がおいしい飲み物になったというものではありません。神の国が今、到来した。その喜びにあふれる祝宴が今、始まった。それが今日の聖書がわたしたちに伝えてくれる、よろこびの知らせなのです。

この2000年間、わたしたちの信仰の先輩方も、「水がめに水をいっぱい入れなさい」というイエス様の言葉を聞いて、絶対に自分たちが汲んできた水はぶどう酒に変えられるとの希望を胸に、歩んでこられました。

そして今も、神さまはイエス様を通して、わたしたちに関わって下さっています。わたしたち一人ひとりをも、神の国の宴に来るようにと招いておられるのです。

「水がめに水をいっぱい入れなさい」、その言葉は、わたしたちにも語られています。わたしたちの手で、水を汲みにいくのです。必ずその水は、ぶどう酒へと変えられます。神さまの栄光がわたしたちの前にもあらわされるのです。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>